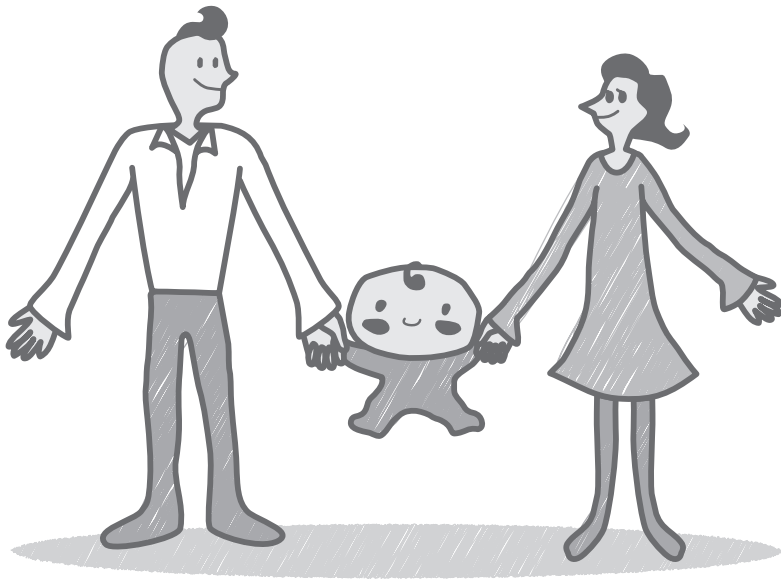


## 第3章

# 子育てと夫婦関係

高岡 純子



この節では、育児期の夫婦に焦点をあてて、妻・夫がそれぞれどのように家事・育児に取り組んでいるかの実態と意識についてみていきたい。

### ● 家事・育児の実態

育児期の妻・夫は、それぞれ家事と育児にどのくらい取り組んでいるのだろうか。ここでは、家事3項目（洗濯、掃除、炊事（食事の用意・片付け））、育児4項目（子どもと遊ぶ、おむつ替え・トイレ、寝かしつけ、落ち着かせる）の計7項目の実態についてきている。育児期妻では（図3-1-1）、家事については、「ほとんど毎日する」のは、「炊事（食事の用意・片付け）」89.7%、「洗濯」76.2%、「掃除」39.4%の順である。食事は日々必要なことなので、自分で食事の準備・後片付けに毎日取り組む妻が約9割にのぼる。「洗濯」や「掃除」の割合が若干下がるのは、ある程度まとめて行うことが可能なのであろう。育児については、4項目すべてが9割以上となっている。0～2歳の子どもは、寝かしつけやおむつ替えなど、生活の世話に手がかかる時期であり、ほとんどの妻が毎日これらに取り組んでいる様子がうかがえる。

夫の場合をみてみよう（図3-1-2）。毎日取り組む項目を上位3項目で見ると、「○○ちゃんと遊ぶ」52.4%、「○○ちゃんのおむつ替え・トイレ」24.5%、「○○ちゃんが

ぐずったとき、落ち着かせる」12.9%である。いずれも育児の項目が上位に挙がっていることから、夫は、家事よりも育児のほうにより多く取り組んでいる様子がうかがえる。

夫の育児では、「ほとんど毎日する」「週に3～5回する」をあわせた比率で見ると、「○○ちゃんと遊ぶ」は74.5%である。子どもと遊ぶことは、父親にとってもっとも取り組みやすい育児のようである。同様の頻度で見ると、「○○ちゃんのおむつ替え・トイレ」は50.9%で、2人に1人が週に3回以上の頻度でおむつ替えをしている。「○○ちゃんがぐずったとき、落ち着かせる」32.4%、「○○ちゃんを寝かしつける」22.4%は、どちらも育児としてはやや難易度の高いと思われる項目であるが、日ごろからかかわっている父親が2～3割はいるようである。「○○ちゃんを寝かしつける」の比率が少ないのは、子どもが寝る時刻に、まだ夫が帰宅していないといったケースも含まれるのではないだろうか。家事については、週に3回以上取り組んでいる比率は、「炊事」で約2割、「洗濯」「掃除」は1割以下となっており、妻の取り組みの比率とかなり離れているといえよう。

図3-1-1 家事・育児の頻度（育児期妻）

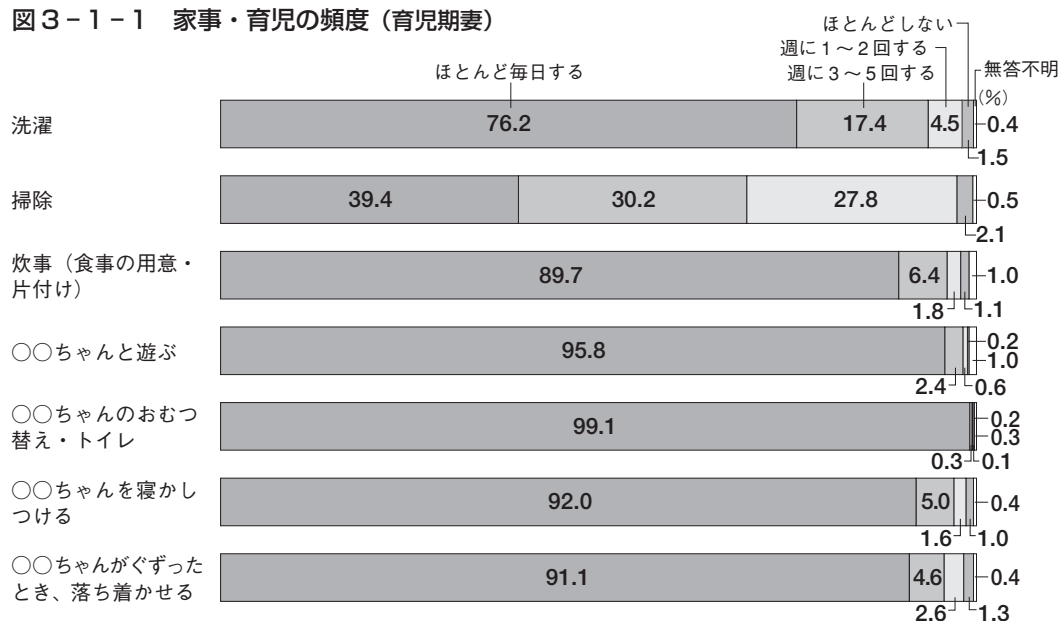
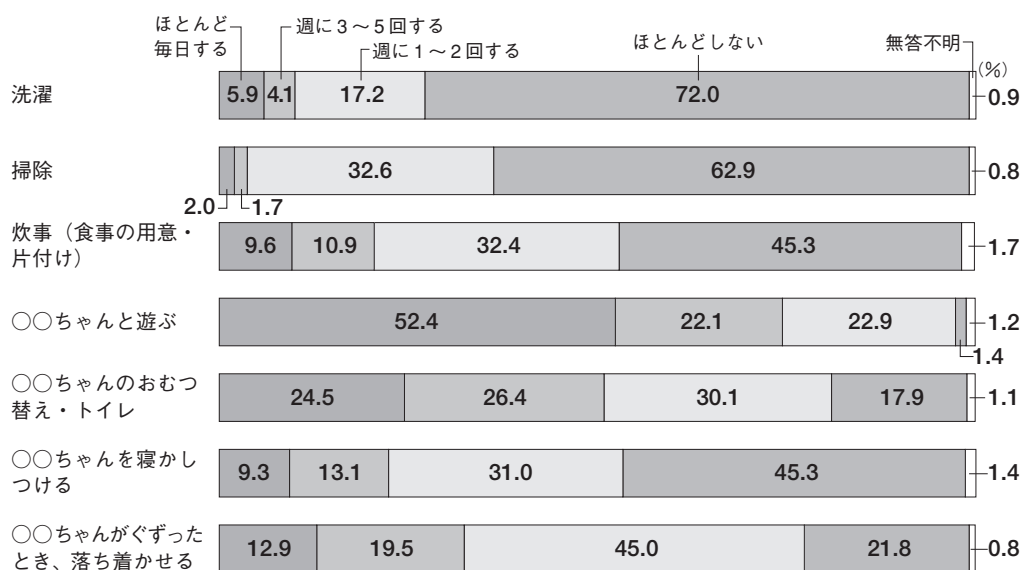


図3-1-2 家事・育児の頻度（育児期夫）



夫の家事・育児の取り組みについて、妻の就業別にみたものが図3-1-3、図3-1-4である。

働いている妻を持つ夫の場合、「炊事」を「ほとんど毎日する」人は15.7%、「洗濯」は10.2%であり、夫の10～15%は毎日していることになる。働いていない妻を持つ夫では、いずれの項目も働いている妻を持つ夫の約半分以下の比率になる。

育児に関する項目では、働いている妻を持つ場合、毎日おむつを替えている夫は29.9%、

ぐずったときに子どもを落ち着かせているのは15.0%、寝かしつけは11.3%である。妻が働いていない場合は、すべての項目で、比率が低くなっている。

全体的にみて、妻が仕事をしている夫は、妻が仕事をしていない夫に比べて家事・育児をする比率は高い。しかし、妻が仕事をしている場合でも、「洗濯」「掃除」を「ほとんどしない」と回答している夫は、半数以上いる。「炊事」では、「ほとんどしない」は36.9%である。育児では、おむつ替えや、ぐずったと

図3-1-3 家事・育児の頻度（育児期夫、妻は仕事を持っている）

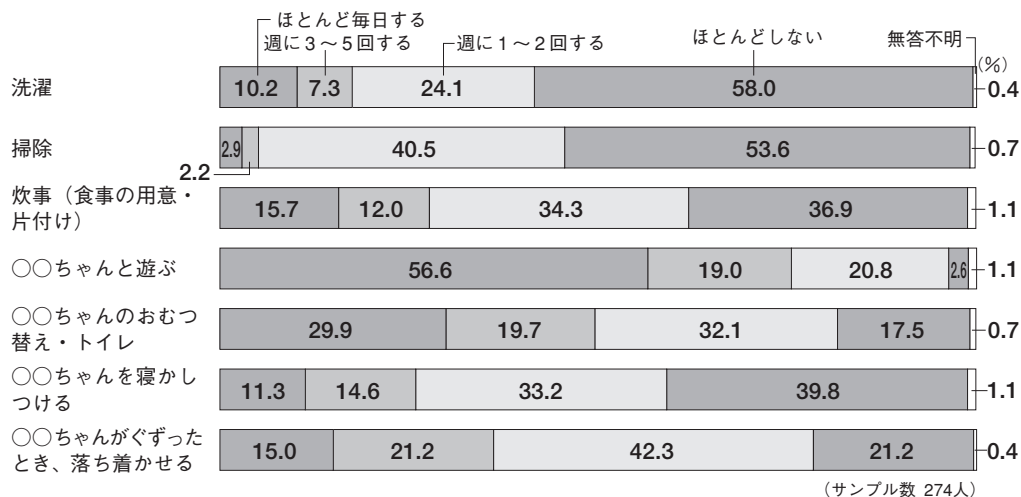
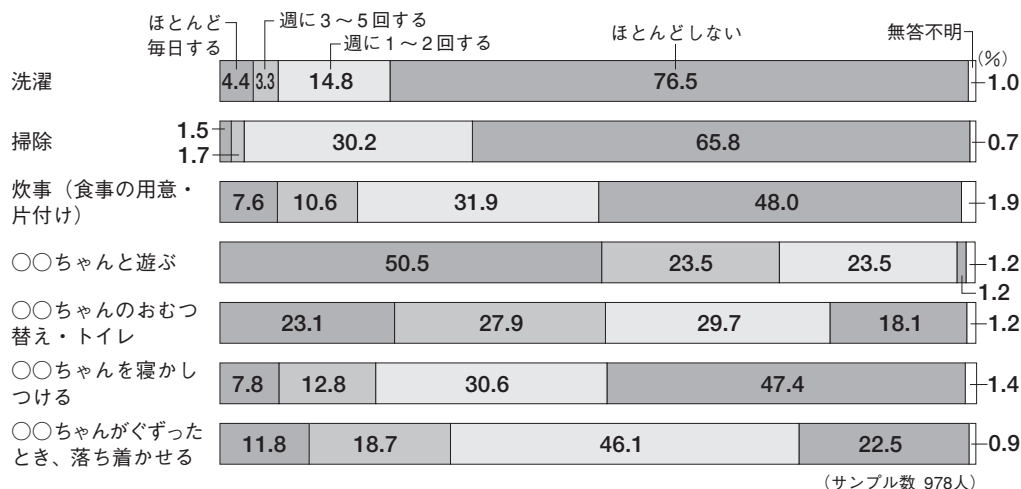


図3-1-4 家事・育児の頻度（育児期夫、妻は仕事を持っていない）

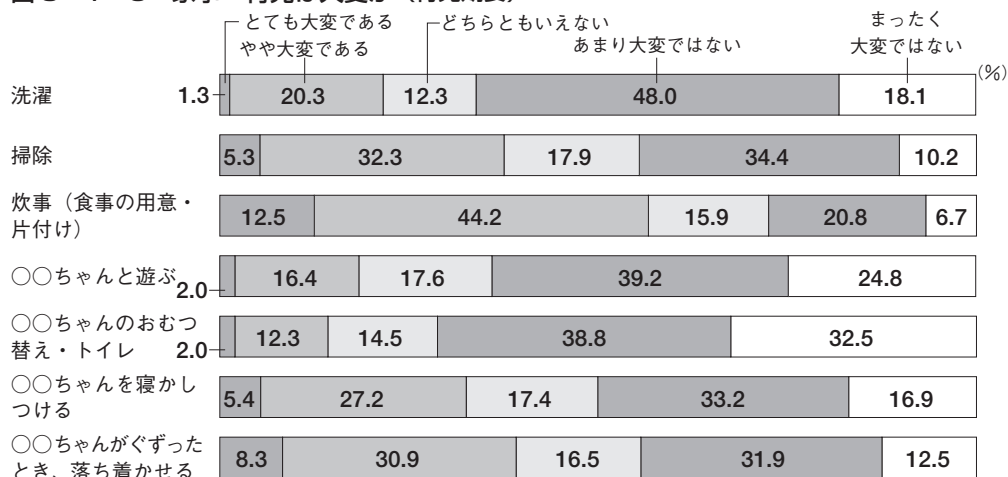


きに落ち着かせることを「ほとんどしない」夫は約2割いる。妻が仕事をしていても、項目によっては夫の家事・育児への協力を得られないケースが存在するようである。

それぞれの家事・育児を、どの程度大変に感じているかについて、育児期の妻・夫にきいたものが図3-1-5、図3-1-6である。妻が大変だと思う項目（「とても大変である」+「やや大変である」）で、30%を超えるものは「炊事」56.7%、「〇〇ちゃんがぐずったとき、落ち着かせる」39.2%、「掃除」

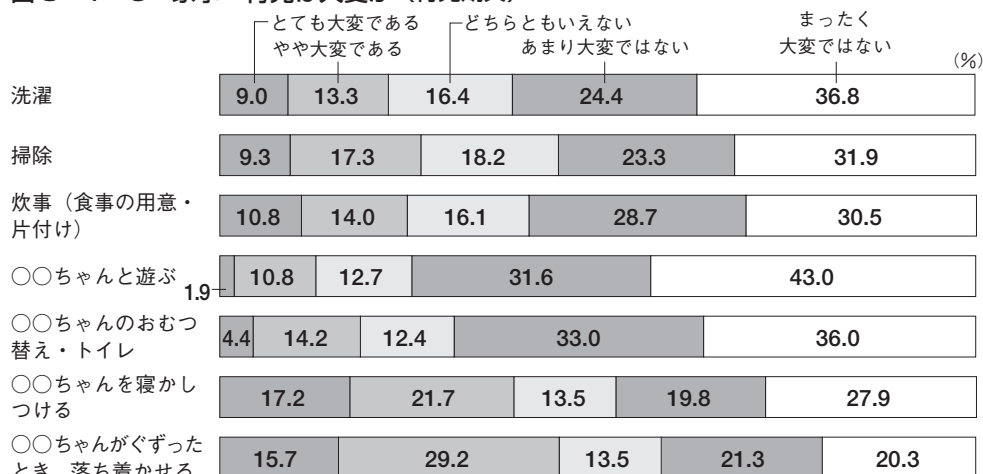
37.6%、「〇〇ちゃんを寝かしつける」32.6%であった。「炊事」は、妻の89.7%がほとんど毎日取り組んでいる項目であり、その大変さが反映されていると思われる。一方、夫の場合で30%を超えている項目は、「〇〇ちゃんがぐずったとき、落ち着かせる」44.9%、「〇〇ちゃんを寝かしつける」38.9%である。育児とひと口にいっても、その内容によって夫の大変さは変わってくるようである。子どもと遊ぶことや子どものおむつを替えることはあまり大変ではないが、ぐずっているのを

図3-1-5 家事・育児は大変か（育児期妻）



注)「無答不明」は除く。

図3-1-6 家事・育児は大変か（育児期夫）



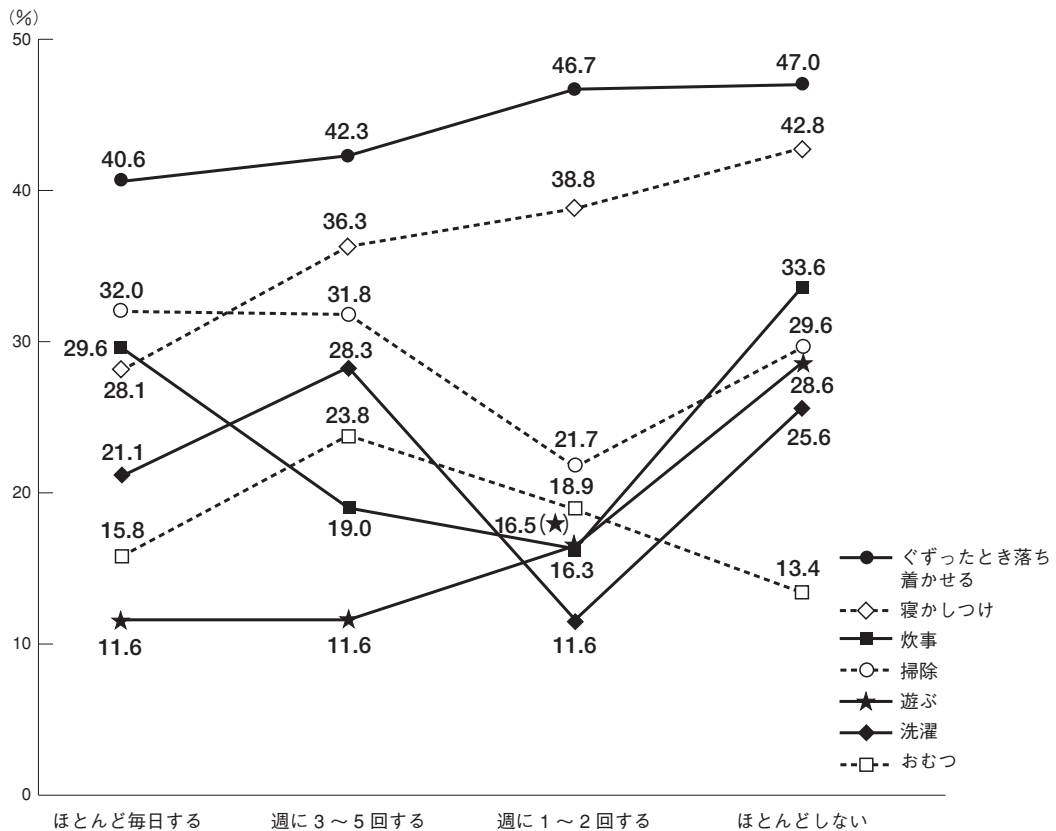
注)「無答不明」は除く。

なだめたり、寝かしつけたりすることは、大変なようである。

図3-1-7は、夫の家事・育児の大変さについてのグラフである。「〇〇ちゃんがぐずったとき、落ち着かせる」は、取り組む頻度にかかわらず、大変であるという回答率ももっとも高く、頻度が少なくなるほど、大変さは高くなる。「〇〇ちゃんを寝かしつける」

も、ほぼ同様の傾向で大変さは高いが、ほとんど毎日する場合は、大変さが28.1%と低くなっている。日々の習慣とすることで大変さが軽減されるのだろうか。「ほとんどしない」場合は、おむつ替え以外の家事・育児の大変さで、「週に1～2回する」よりも高くなっている。

図3-1-7 家事・育児は大変か（育児期夫、家事・育児の頻度別）



注1) 「とても大変である」＋「やや大変である」の%。  
 注2) 項目は一部、略記した。詳細は図3-1-6を参照のこと。

この節では、妊娠期、育児期それぞれの時期における夫婦の関係についてみていきたい。

図 3-2-1 は、妊娠期の妻・夫の夫婦関係に関するものを妻の「あてはまる」数値の高い順に並べたものである。「あてはまる」が高い順にみていこう。上位 2 項目は、妻・夫ともに同じ項目である。「私と配偶者は幸せな結婚生活を送っていると思う」「配偶者といると本当に愛していると実感する」で、いずれも 70% を超えている。「ややあてはまる」をあわせると 90% を超えることから、結婚に対する幸せの度合い・配偶者への愛情は、妊娠期では妻・夫ともに高い。ついで第 3 位は、妻が「私の配偶者は、私の体調をよく気遣ってくれる」65.1% である。調査対象時期の妊娠後期は、まもなく出産を迎えるころであるため、妻を気遣う夫の様子がうかがえる。夫の第 3 位は「私の配偶者は、私の仕事、家事をよくねぎらってくれる」62.4% であった。

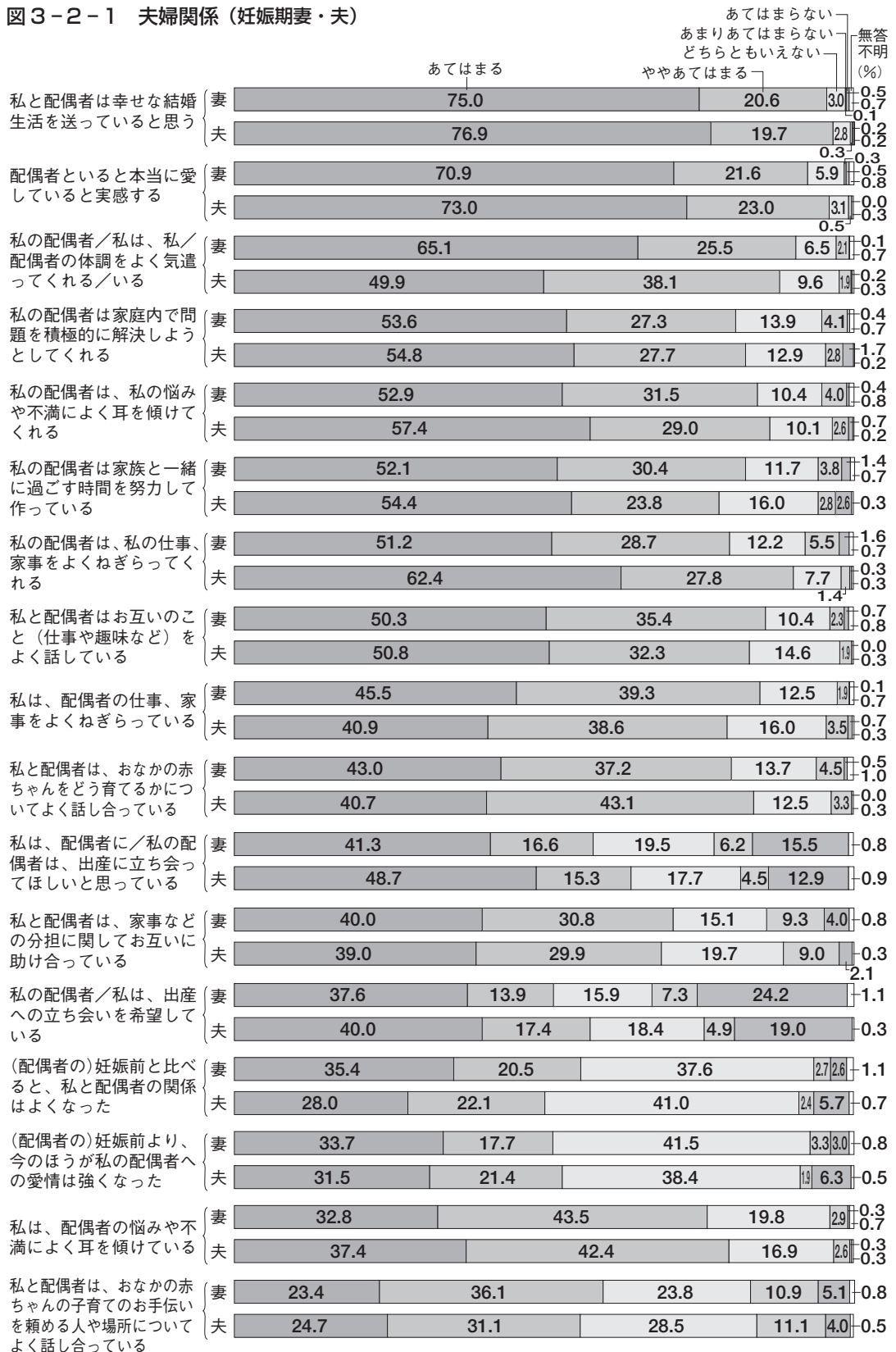
逆に「あてはまる」の数値がもっとも低い項目は、妻・夫ともに「私と配偶者は、おなかの赤ちゃんの子育てのお手伝いを頼める人や場所についてよく話し合っている」で、ともに 20% 台であった。「ややあてはまる」をあわせると約半数となるが、子どもが生まれたあとのことについては、まだ具体的に話題にならないことが多いと思われる。

それでは、妊娠期の妻と夫で回答に差があるのはどのような項目であろうか。夫婦共通の質問 14 項目のうちで、5 ポイント以上の差がみられたのは、以下の 4 項目であった。「私の配偶者は、私の体調をよく気遣ってくれる

／私は、配偶者の体調をよく気遣っている」(妻 65.1% > 夫 49.9% で 15.2 ポイントの差)、「私の配偶者は、私の仕事、家事をよくねぎらってくれる」(妻 51.2% < 夫 62.4% で、11.2 ポイントの差)、「私は、配偶者に／私の配偶者は、出産に立ち会ってほしいと思っている」(妻 41.3% < 夫 48.7% で、7.4 ポイントの差)、「(配偶者の) 妊娠前と比べると、私と配偶者の関係はよくなった」(妻 35.4% > 夫 28.0% で、7.4 ポイントの差)。自分に対する配偶者のねぎらいについての評価は、夫よりも妻のほうが低い。

図 3-2-2 は、妻と夫をカップリングしたデータをみたものである。「私は、配偶者の仕事、家事をよくねぎらっている」(夫)と「私の配偶者は、私の仕事、家事をよくねぎらってくれる」(妻)の回答は必ずしも一致しない。夫が妻のことを「よくねぎらっている」と自己評価した比率(「あてはまる」)は 40.9%、その妻のうち、夫は自分を「よくねぎらってくれる」と回答している(「あてはまる」)のは 69.1% であった。23.0% は「ややあてはまる」、7.8% は「どちらともいえない」「あまりあてはまらない」「あてはまらない」と回答している。逆のケースをみると、妻が夫のことを「よくねぎらっている」と回答した割合は 45.8%、その夫のうち、妻が「よくねぎらってくれる」と回答している(「あてはまる」)夫は、78.7% であった。夫から妻への評価のほうが、妻から夫への評価よりも高くなっている。

図3-2-1 夫婦関係（妊娠期妻・夫）

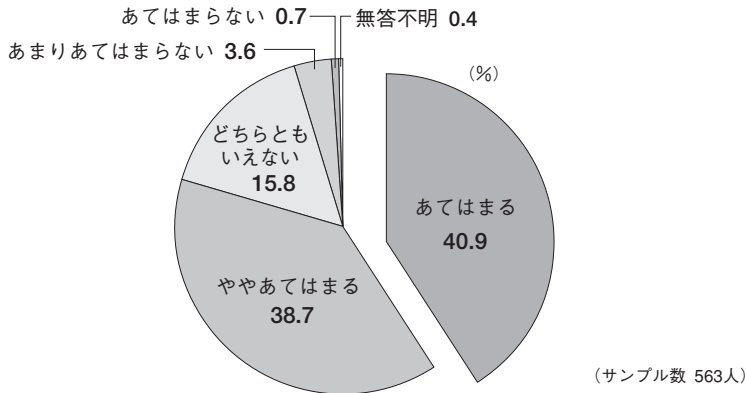


注) 項目は一部、略記した。詳細は「調査票見本」(p.143)を参照のこと。



図3-2-2 仕事、家事へのねざらい（妊娠期妻・夫）

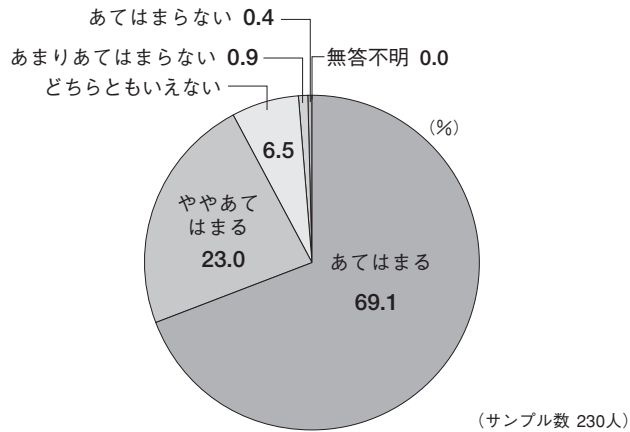
私は、配偶者の仕事、家事をよくねざらっている（夫）



注) 夫婦をカップリングしたデータであるため、基礎集計表の数値とは異なっている。

「あてはまる」と回答した夫（230人）の妻の回答

私の配偶者は、私の仕事、家事をよくねざらってくれる（妻）



注) 夫婦をカップリングしたデータであるため、基礎集計表の数値とは異なっている。

図3-2-3は、育児期の妻・夫の夫婦関係に関するものを妻の「あてはまる」数値の高い順に並べたものである。妊娠期と同様に「私と配偶者は幸せな結婚生活を送っていると思う」が妻・夫ともに第1位（妻52.0%、夫60.0%）で、半数以上が「あてはまる」と回答している。他3位以内に入るものは、妻・夫ともに「私の配偶者は家族と一緒に過ごす時間を努力して作っている」、夫では「配偶者といると本当に愛していると実感する」54.9%、妻では「私の配偶者は家庭内で問題を積極的に解決しようとしてくれる」43.5%である。第1子が0～2歳の夫婦では、家族と一緒に過ごす時間を大切に、家庭内の問題には夫婦で積極的に解決に向けて対応することが多いようである。

「あてはまる」の数値がもっとも低い項目は、妻は「出産前より、今のほうが私の配偶者への愛情は強くなった」13.4%で、夫は「私と配偶者は、〇〇ちゃんの子育てのお手伝いを頼める人や場所についてよく話し合っている」15.5%である。

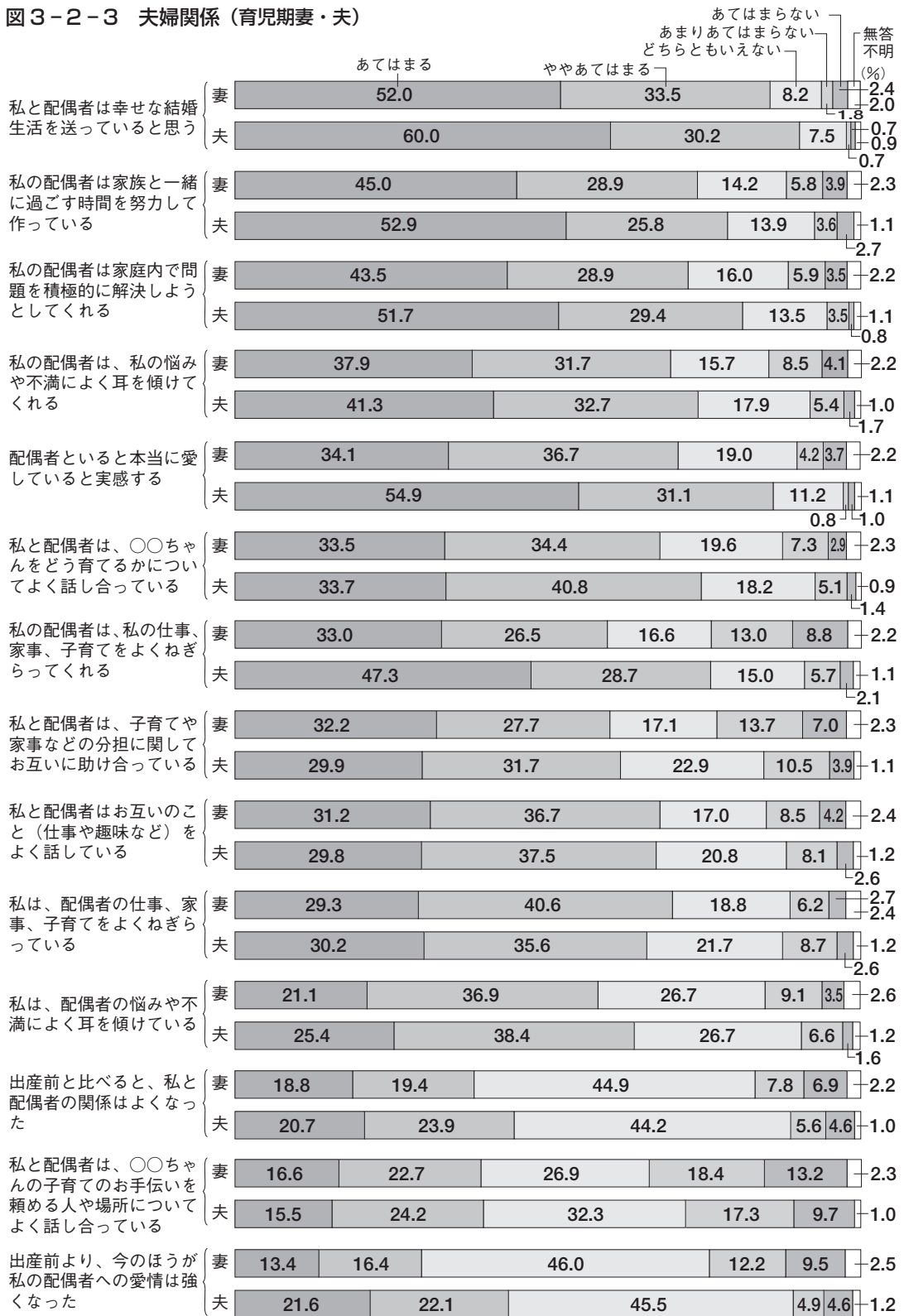
育児期の妻と夫で5ポイント以上回答に差があるのは、以下の6項目であった。「私と配偶者は幸せな結婚生活を送っていると思う」（妻52.0%＜夫60.0%で、8.0ポイントの差）、「私の配偶者は家族と一緒に過ごす時間を努力して作っている」（妻45.0%＜夫52.9%で、7.9ポイントの差）、「私の配偶者は家庭内で問題を積極的に解決しようとしてくれる」（妻43.5%＜夫51.7%で、8.2ポイントの差）、「配偶者といると本当に愛していると実感する」（妻34.1%＜夫54.9%で、20.8ポイントの差）、「私の配偶者は、私の仕事、家事、子育てをよくねぎらってくれる」（妻33.0%＜夫47.3%で、14.3ポイントの差）、「出産前より、今のほうが私の配偶者への愛情は強くなった」（妻13.4%＜夫21.6%で、8.2ポイントの差）である。いずれの項目でも、妻が低く、夫のほうが高くなっている。夫は、配偶者は自分をよくねぎらってくれ、家族の問題に積極的に対応してくれる存在であると認識してお

り、幸せな結婚生活だと実感しているが、妻の回答率は低く、夫ほど配偶者を高く評価していないようである。

妻と夫で差があった項目について、子どもの年齢別に傾向をみてみよう。図3-2-4、図3-2-5は「配偶者といると本当に愛していると実感する」について、妊娠期から子どもが2歳になるまでをみたものである。妻・夫ともに、子どもの年齢が上がるほど、「あてはまる」の数値が低下していく。妊娠期では、妻70.9%、夫73.0%でその差は2.1ポイントであるが、妻・夫ともに徐々に数値が下がり、子どもが2歳になると、妻22.7%、夫43.1%でその差は20.4ポイントに開く。夫よりも妻のほうが減少する幅が大きい。「私の配偶者は、私の仕事、家事（子育て）をよくねぎらってくれる」（図3-2-6、図3-2-7）では、妊娠期で「あてはまる」は妻51.2%、夫62.4%であるが、子どもが2歳になると妻26.7%、夫42.0%となる。妻・夫の差は開かないが、どちらも20ポイント以上減少している。「あまりあてはまらない」「あてはまらない」は、妻は子どもの年齢が上がるにつれて増加しており、2歳になると3割弱を占めるようになる。4人に1人は、夫が自分をねぎらってくれることに否定的な回答をしている。一方、夫は「あてはまる」比率が、妊娠期から0歳の間で、8.9ポイント下がる。この時期に比率が下がることから、子どもが生まれた後に、妻から夫へのねぎらいが少なくなっていく様子がうかがえる。

妻が仕事を持っている場合、夫婦の関係はどうなるのだろうか。図3-2-8～図3-2-10は、妻が働いている場合と働いていない場合に分け、夫の評価を比べたものである。「配偶者といると本当に愛していると実感する」「私と配偶者は幸せな結婚生活を送っていると思う」「〇〇ちゃんが生まれる前と比べると、私と配偶者の関係はよくなった」の3項目で、妻が働いているほうが、夫の「あてはまる」数値が低くなっている。いずれの項目も「ややあてはまる」を加えると、妻の仕事の有無による差はわずかとなる。

図3-2-3 夫婦関係（育児期妻・夫）



注) 項目は一部、略記した。詳細は「調査票見本」(p.156)を参照のこと。

図3-2-4 配偶者といると本当に愛していると実感する（妻、子どもの年齢別）

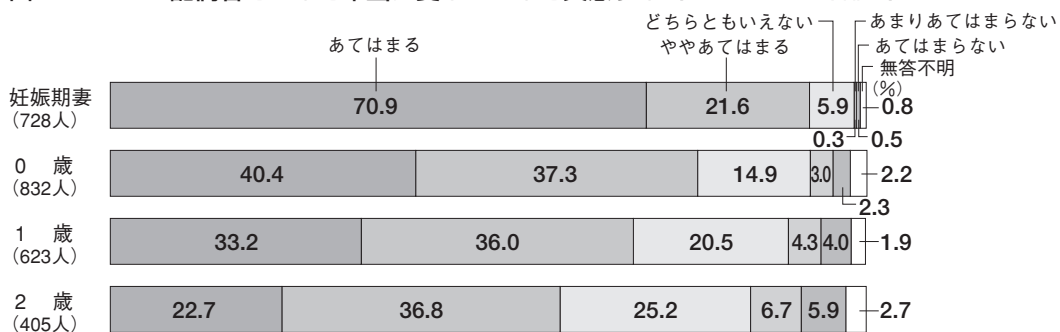


図3-2-5 配偶者といると本当に愛していると実感する（夫、子どもの年齢別）

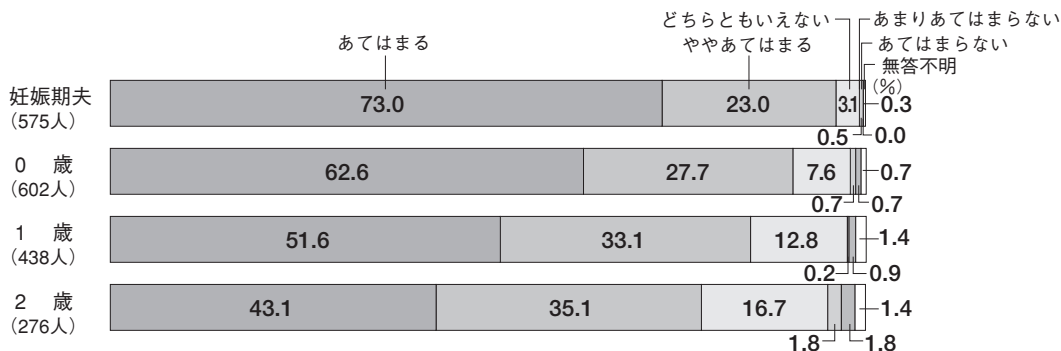


図3-2-6 私の配偶者は、私の仕事、家事(子育て)をよくねぎらってくれる（妻、子どもの年齢別）

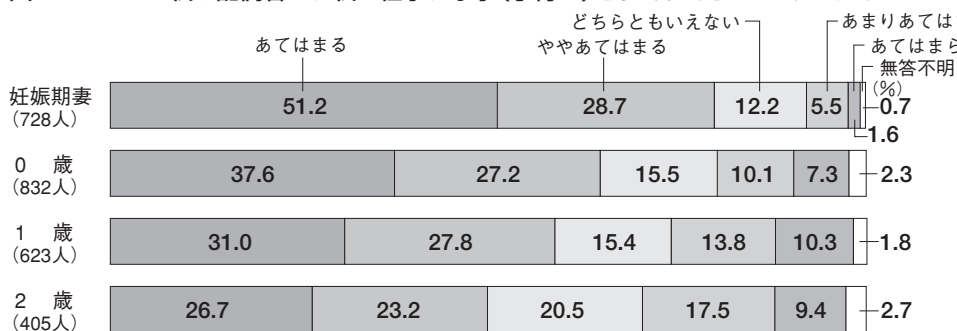


図3-2-7 私の配偶者は、私の仕事、家事(子育て)をよくねぎらってくれる（夫、子どもの年齢別）

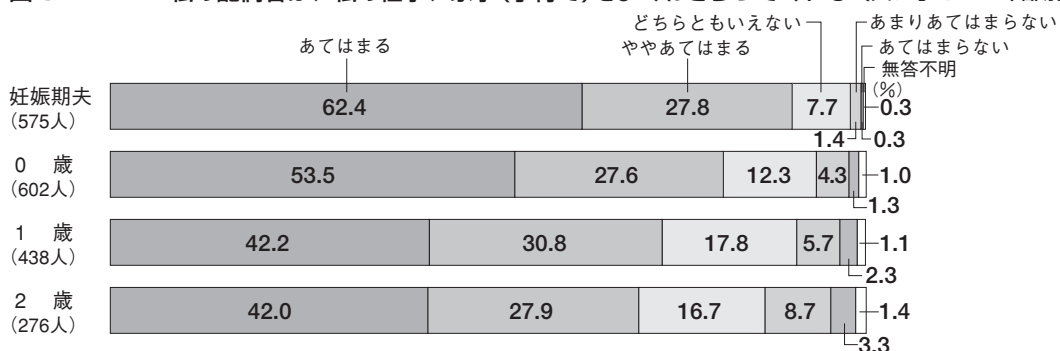


図3-2-8 配偶者といると本当に愛していると実感する（育児期夫、妻の仕事の有無別）

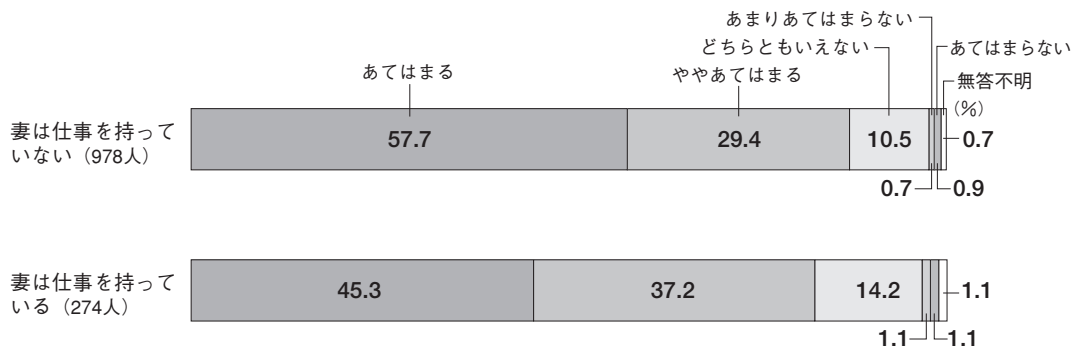


図3-2-9 私と配偶者は幸せな結婚生活を送っていると思う（育児期夫、妻の仕事の有無別）

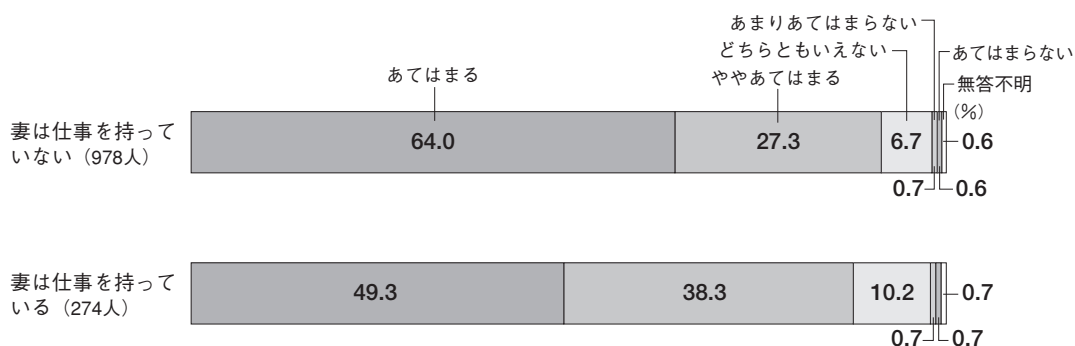
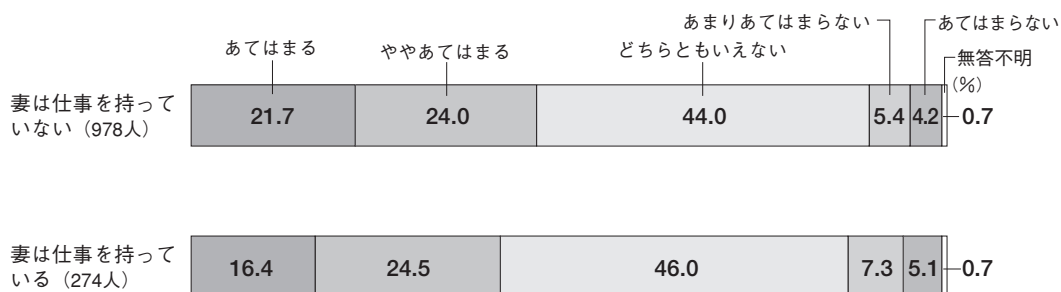


図3-2-10 ○○ちゃんが生まれる前と比べると、私と配偶者の関係はよくなった（育児期夫、妻の仕事の有無別）



この節では、妊娠期・育児期の妻・夫が、自分の役割配分（親として、妻／夫として、社会人・職業人として、個人として）をどのようにとらえているのかについてみていきたい。

妊娠期あるいは育児期の妻・夫は、自分の役割配分をどのようにとらえているのだろうか。4つの役割について、その理想と現実の配分をきいてみた。4つの配分は、「親としての自分（出産の準備、妊娠のケア、子育ての情報収集／子どもとの関係など）」「妻／夫としての自分（配偶者との関係など）」「社会人・職業人としての自分（仕事・ボランティアなどの社会活動）」「個人としての自分（地域社会との関係、趣味など）」である。4つの役割を、足して全体で100%となるように配分を回答してもらった。

図3-3-1では、妊娠期妻の回答の平均を理想と現実と比べている（以下同）。妊娠期妻は、現実と理想に大きな差はみられない。現実の比率で見ると、「親としての自分」が約4割、「妻としての自分」が4割、「社会人・職業人としての自分」が約1割、「個人としての自分」が約1.5割という配分になっている。

妊娠期夫の場合では（図3-3-2）、「親としての自分」は、現実よりも理想のほうが高く、逆に「社会人・職業人としての自分」は現実より理想のほうが低くなっている。はじめての子どもを迎えるにあたっての準備など、親としての役割をもっと増やすことが理想だが、現実には、仕事などが忙しく、職業人としての役割のほうが大きくなっていると

いった状況がうかがえる。

育児期妻の場合は（図3-3-3）、「親としての自分」は、現実よりも理想のほうが低く、「個人としての自分」や「社会人・職業人としての自分」「妻としての自分」は現実よりも理想のほうが高くなっている。子育てをする中で、もう少し個人や社会人・職業人としての役割を増やしたいと思うが、現実には、子どもの世話などの親としての役割比重が大きくなっているということだろう。育児期妻の「親としての自分」の現実と理想の差は大きく、15.5ポイントとなっている。

育児期夫では（図3-3-4）、「社会人・職業人としての自分」は、現実より理想のほうが低くなっており、その差は12.0ポイントである。それ以外の役割では、現実より理想のほうが高くなっている。仕事が忙しく、「社会人・職業人としての自分」の役割がもっとも大きくなっており、その分、親として、夫として、個人としての役割の比重が理想よりも小さくなっている状況がうかがえる。ワークライフバランス（第5章を参照）に対する不満がもっとも大きいのも育児期夫であり、仕事とそのほかの生活とのバランスがうまくとれていない状況にあるといえる。育児期の場合、今後、そのあたりのバランスをどのように改善するかといった課題がもっとも大きい。

図3-3-1 役割配分：理想と現実（妊娠期妻）

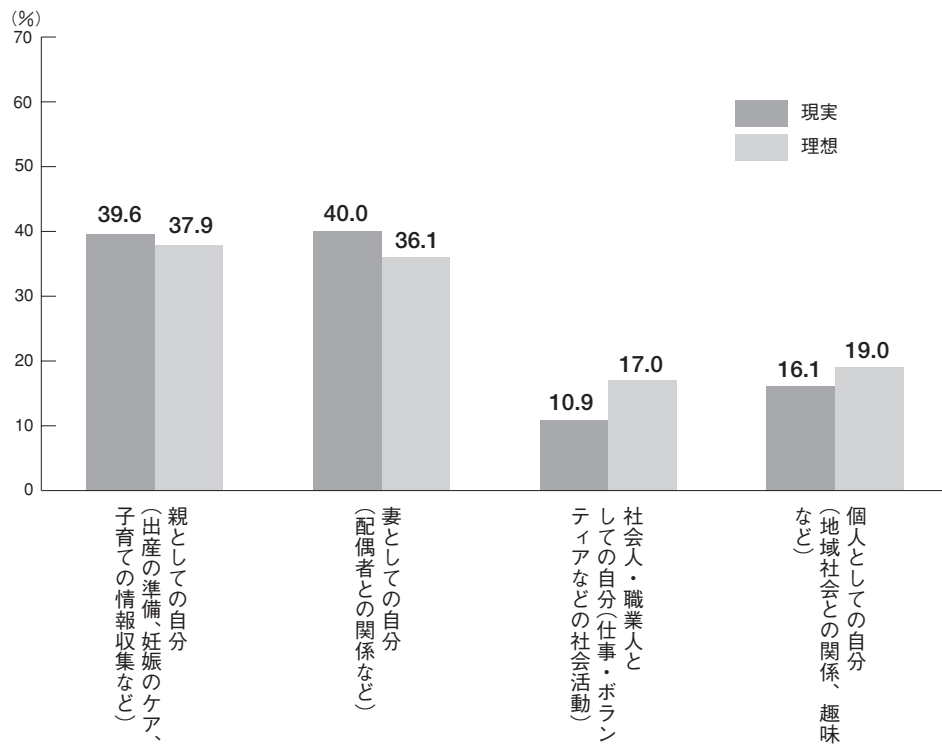


図3-3-2 役割配分：理想と現実（妊娠期夫）

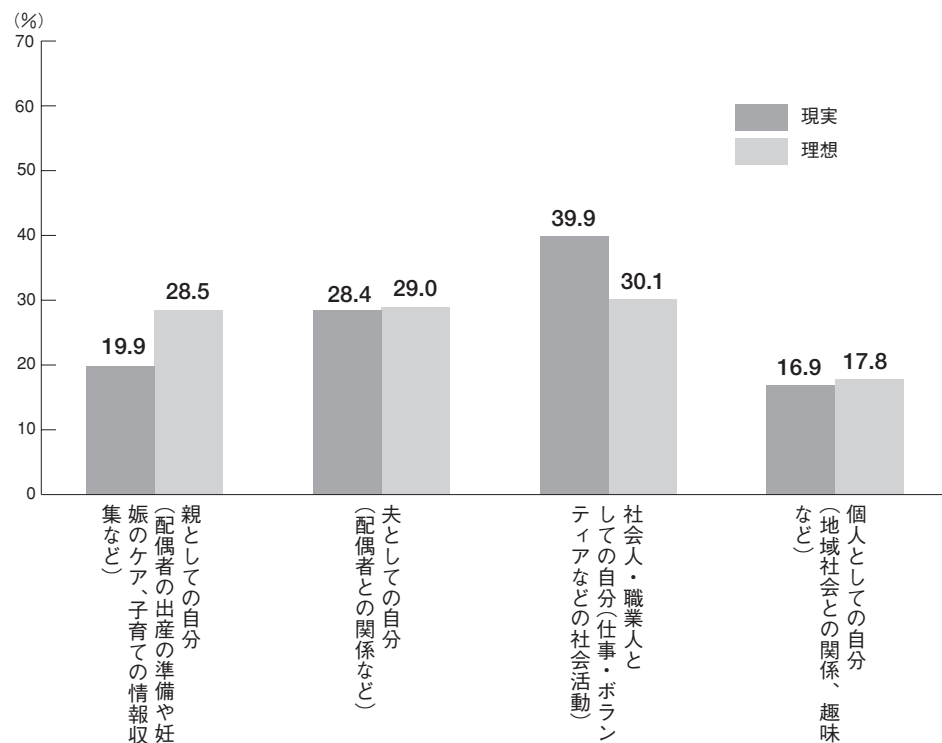


図3-3-3 役割配分：理想と現実（育児期妻）

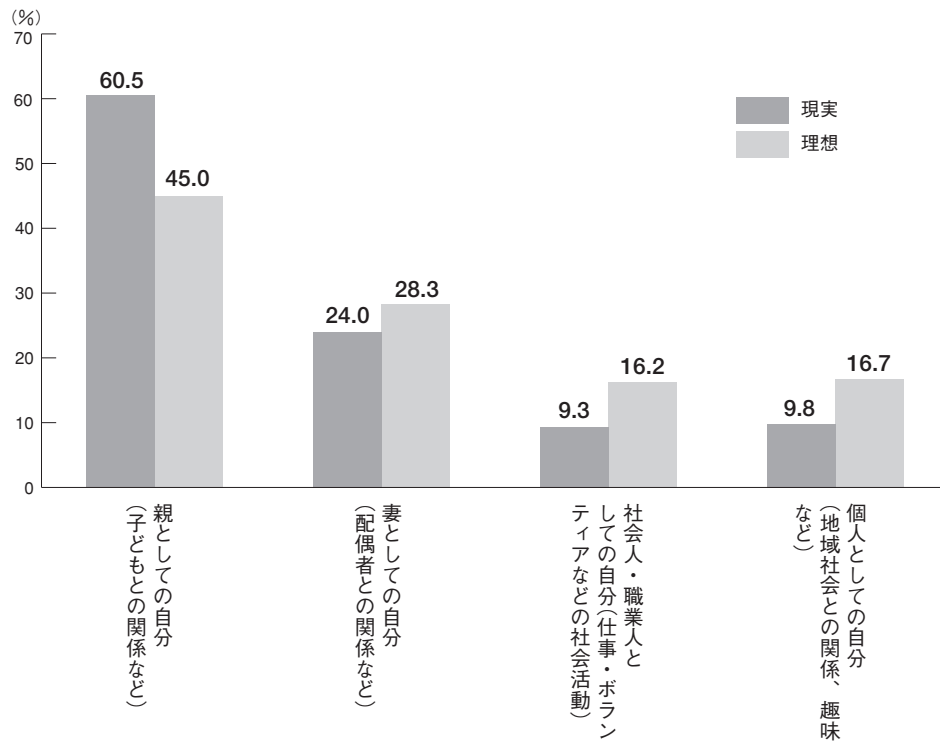


図3-3-4 役割配分：理想と現実（育児期夫）

